

講演会「おみくじの版木」

平成 26 年 11 月 16 日（日）

永井 一彰 氏



島本町の皆さんこんにちは。奈良大学の永井でございます。今日は勝幡寺のおみくじの版木についてお話をすることになってますが、その前に版木の基礎知識をご理解頂きたいと思います。

町で作って頂いたチラシでは、版木の「版」、私のレジュメは「板」と言う字を書いています。ただ、版木と板木の意味は同じです。ただ、版木関連の文書などを見ますと、ほとんどが板と言う字を使っています。したがって私はこの板と言う字を使うようにしております。

奈良時代からすでに印刷は行われています。文字をひとつひとつ彫って、それを並べて墨を塗って紙を被せてこするという活字印刷があります。奈良時代に印刷された、「百万塔陀羅尼」は、印刷年代がハッキリしている印刷物としては世界最古のものとされており。ただこれは活字印刷であるのか、板木印刷であるのか確定できていません。板木印刷として古い例は、京都府の木津川市加茂町にある平安時代創建の浄瑠璃寺から出て参りました「百体仏」が確認されております。したがって板木印刷は平安時代から行われていたという事が分かります。その後鎌倉、室町期は主に経典を中心として板木印刷が行われます。江戸時代に入り、世の中が安定して平和な時代がやってきて、いわゆる本屋というのが登場してくるわけです。商業出版が始まるんです。江戸時代の出版物のほとんどはこの板木で印刷されてきているわけです。

次は文字の彫り方ですが、断面が薬の材料を砕く薬研という道具の形に似てるので薬研彫りといっています。板木に墨が溜まりにくく、刷毛の運びを良くする為にこういう彫り方をしているわけです。これが、古い時代の板木ほどしっかりと彫ってあるんです。江戸時代の終わり頃になってきますと、これが崩れてきます。だから薬研彫りがしっかりしてる物は、古い時代の物だと考えていいわけです。この勝幡寺のおみくじの板木は薬研彫りがしっかりとしてます。ということは、ある程度古い時代のものだという見当がつくわけです。それから、元禄より以前の物は文字の彫りが深いです。元禄を過ぎて来ますと文字の彫り方が浅くなっていきます。これは、彫りの技術の進歩というのがあるということ。それから、板木の再利用のためです。最初、板木の厚さは大体3センチほどあります。「往来物」「易占書」などの実用書は確実に需要があるので、最初からしっかりとした板木を使っています。ところが売れない本の板木は見切りを付けた段階で、板木を削ってしまうんです。そうすると、少し薄くなるけれどもまたその板木を使えるわけです。再利用の板木は、反りにくくなっているという利点があるんです。そういう事が元禄を境にして起きています。

それから、板木が反るのを防ぐ為に「反り止め」をくっつけます。「食み（はみ）」と言います。これも板木と同様に時代的な変遷があるのですが、実は反り止めは板木ほど残ってないんですね。板木が5000枚残ってたとすると、反り止めが残ってる目安の3分の1位、もっと少ないかもしれません。明治以降、板木がどうしてなくなったのかというと、色んな理由があるんで

すが、ほとんどは焚き木として燃やされてしまったんですね。ただ板木を燃やす場合は綺麗に文字が彫ってあるので罪悪感があるわけです。でも反り止めは要するに木切れですよ。丁度、七輪の焚き木にするのに程良い大きさなんです。だからほとんど燃やされてしまうんですね。それから反り止めの効果は板が反るのを止めるという効果もありますし、もう一つ板木の保存に関わってくるんです。江戸時代の本屋さんは板木を棚に平積みにしていくんです。だから反り止めが無い状態で板木を平積みしますと、文字を彫った面と面が当たり、板木が傷むという事が起きてくるんですね。反り止めを付けると、それが防げる。しかも程良く風も通って保存上非常に具合がいいわけです。江戸時代の本屋さんは板木の収納というのに随分と苦労しているんですね。反り止めにはこういう効果があるわけですね。

今度は、板木がどのくらい持つのかということです。芭蕉の「奥の細道」の板本というのは2種類ありまして、芭蕉の没後まもなく出版された元禄版と、元禄版の板木は火事で消滅したので彫り直したのが寛政版です。したがって、「奥の細道」の元禄版の板本というのは現存していません。それを色々調べていった時に分かってきたんですけども、元禄16年に「奥の細道」の元禄版というのが出ます。そして天明8年までずっと同じ板木を使ってます。約100年です。ところが色々調べてみますと、100年というのは朝飯前で、同じ板木を彫り直しをせずに200年は平気で使うんです。200年ということは、言いかえればこれはもう半永久的ということになります。保存状態さえ良ければ、半永久的に利用が可能なんですね。このように徹底して使います。以上が基礎知識です。

以上の事をふまえて勝幡寺のおみくじの板木がどのような値打ちがあるのかということを考えていきます。まずは、これが「どこで作られたのか」ということです。ここで板木の形状が問題なんです。天地が逆になってることから、これはプロが彫ったんですね。ということは、これは寺で作った物ではない。これは断言出来ます。大阪か京都の専門の本屋に依頼をして作らせている。蔵板といいます。お寺でよくあるんですけど、お寺の御住職が仏教関係の本を出したいとか、それから漢詩集を出したいとかいう場合は、専門の本屋に頼むわけです。印刷したい時に本屋に頼んで、印刷・製本をする。こういうのを蔵板といいます。勝幡寺のおみくじの板木も多分あり方としては、蔵板だと思います。板木はどっかの本屋に勝幡寺が依頼をして作らせ、板木はお寺に置いてありました。必要な時にお寺さんは本屋さんに声をかけて、「今度、200位刷ってくれるかな。」というオーダーをかける。そうすると職人がやって来ます。板木は寺から動かしません。何故かというと板木が紛失するなどのトラブルの元になるからです。勝幡寺の場合も本屋に声をかけて、刷りの職人がやって来ます。そして、お寺で刷り、裁断をする。墨をどこで用意するか？お寺で用意するのか、職人が持ってくるのかによって、印刷代金が変わってくるんです。そういうことを指定した文書もあります。それから職人が動くときに、証明書がいるんですね。鑑札がいるわけです。それから、確定は出来ないんですが、彫り方が古い。薬研彫りがしっかりしている、反り止めが再利用可能なスライド式であることから、元禄以降の比較的古い時期という位しか年代について言えないんです。おみくじの由来については、パネル展示で詳しい説明があるのでそちらをご覧ください。

以上、板木の基本的なお話と、勝幡寺のおみくじの板木がどのあたりに位置付けられるのかという事を見て参りました。私のお話はここで終わらせて頂きます。